

令和元年6月19日現在

機関番号：17601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：26580064

研究課題名（和文）中国古典小説とは何か 「作者」・「語り手」・「主人公」をキーワードに

研究課題名（英文）A study of Chinese Classical Novels: "Author" "narrator" and "protagonist"

研究代表者

上原 徳子 (UEHARA, Noriko)

宮崎大学・語学教育センター・准教授

研究者番号：50452917

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：2015年度は国際学会で口頭発表をした。2016年度は、前年度の方針を転換し、明末の白話短編小説の英語による翻案作品の分析に重点を移した。秋の口頭発表を踏まえ論文「『杜十娘怒沈百寶箱』の翻案について 「杜十娘」からMiss Tuへ」、さらに「翻案作品分析からみた『杜十娘』」を発表した。2017年度は、「近代知識人の古典小説観について 林語堂をてがかりに」と題した口頭発表を行い、関連論文は翌年度「林語堂による英訳『鶯鶯傳』について」として発表した。同じ作品について特に作品の序文についての論文を執筆し、『林語堂による英訳『鶯鶯傳』前書きの検討』を発表し、前述の論文を補足することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、研究者が中国古典小説研究を行う上で常に抱えるジレンマである、「小説」とは何を指すのかという問題の解決と、古典小説の定義づけを行うことを目的の一つとし、当初は明末の自伝文を対象としていたが、後に検討対象を変更し、中国近代知識人が中国古典小説を英語に翻案した事例を分析することで、この問題にアプローチすることができた。ただし、本研究には、多くの未解決の点があり、それらについては本研究を引きつづ形で始める基盤研究C「中国近代における「古典小説」概念形成に関する研究」においてさらに深化させることができよう。

研究成果の概要（英文）：In fiscal 2015, I made an oral presentation at an international conference. In fiscal 2016, the policy of the previous fiscal year was changed, and the emphasis was shifted to the analysis of the adaptation of the white story short novel in English at the end of the Ming period. Based on the oral presentation in autumn, the group presented a paper entitled "A study of the adaptation of Du Shiniang Sinks Her Jewel Box in Anger :from Du Shiniang to Miss Tu" "and " A Study of How Dushiniang Is Written by an Analysis of an Adaptation Work". I was able to supplement the earlier work by writing a paper on the same work, especially on the preface of the work, and publishing "A study of Lin Yutang's Preface to the English translation Yingyingzhuan".

研究分野：中国古典小説

キーワード：中国古典小説 中国近代知識人 翻案

1. 研究開始当初の背景

今日小説に限らず古典分野については、文献について大量のデータ処理が可能になったことが版本研究や成立史に関する研究の勢いを助けており、その方面の研究が成果を上げている。主要な学術誌における中国古典小説関連の研究論文のほとんどが、文献学的な視点、また作品の内容や背景、作者の経歴や思想研究の立場から述べられているという現状は、それらが信頼するに足る従来の研究手法を踏襲しているため必然だと考えられる。新しい理論を応用した研究は、その理論の使用について妥当性が検証され、それが広く認識され、普遍的になってからでなければ、例えば論文が権威ある雑誌に採用されることは難しい。しかし、根本的な問いである、中国の古典小説(言文一致文で書かれた現代小説は除く)とは何か、という根本的問いに答えようとする試みはあまりみられない。本研究の「語り手」「作者」「主人公」というキーワードは西洋文学批評理論に拠るものである。また、分析の手順を考慮し、四大小説といわれる長篇ではなく、短篇の文言作品をその分析対象とした。これまであまり用いられてこなかった手法を導入しようという試みであった。

中国古典小説研究において、そもそも「小説」という形式が曖昧であること、その定義を明らかにすることが現状では困難であることは研究者に共通した認識である。この本質的問題にアプローチすることなく行われている現在の「小説研究」は、遠くない未来行き詰まりをみせるのではないか。このような大きな問題に、個人が短期間で答えを出すことは不可能である。既存の研究が伝統的な手法をとり、それが答えを出せないのであれば、既存の研究と異なった手法をとるしかないだろう。

2. 研究の目的

我が国の中国古典小説研究は、現在成立過程についての文献学的研究や、作品の詳細な解釈及び背景考察が主流である。しかし、そもそも中国古典文学における「小説」の定義は曖昧で、それは依然根本的な問題として存在している。この疑問に短期間に答えを出すことは難しいが、一つの突破口として、西洋文学批評理論の導入が考えられる。そこで、まずは小説的要素を有しているとされる「伝」に着目し、西洋文学批評理論の方法を用いて分析・検討する。本研究は、中国古典小説がなぜ「小説」と呼ばれるのかという根本的な問いの一端を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、以下のような項目について研究を進めたいと考えた。まず、先行研究の評価と問題点の整理を行う。さらに以下の二点に絞って実際の作品分析への応用をしたいと考えている。次に、明代の自伝文の分析を通じた「語り手」、及び古典文学のジャンル「伝」の「小説」との類似点と相違点についての考察を行う。また、中国古典小説研究を行う上で常に抱えるジレンマである、「小説」とは何を指すのかという問題について、特に文言文においてテキスト分析を行うことでその答えに近づこうとする。

調査と作品分析を同時並行し、研究の成果は口頭発表および論文として発表することとした。

4. 研究成果

本研究の成果は以下のようにまとめられる。

平成 27 年度

当該年度は最近の西洋文学批評を利用した中国小説についての論文を収集した。ここ数年においては、これらに関する論考は多いとはいえなかった。また、理論そのものへの関心はあっても小説分析への応用を試みるものはみられなかった。この結果が意味するのは、現在西洋文学理論の中国古典小説分析への応用そのものがあまり有効とは思われていないということであろうと判断した。また、研究の実績としては、明代文学学会での発表と明人自伝文を読む会への参加が挙げられる。8月に中国北京で行われた明代文学学会に参加し、論文の提出並びに口頭発表を行った。論文は、文言小説と白話小説の改編問題を扱った。最近の日本での研究動向の分析の後、具体的な作品の検討を行い、特に両文体の間で内容がほぼ同様のものがあることを確認し、文体が違っても描く内容が同じ場合があることは、文体間の価値観が接近していたことを意味すると考えられることを指摘した。発表後、中国の研究者からの意見をもらうことができ、自らの知見を深め、今後の研究へのヒントを得ることができた。さらに、京都において定期的に行われていた明代の自伝文を読む研究会に参加した。萬曆松江の陸樹聲の自伝文「九山散樵傳」を担当し、朝廷の高官となったものの故郷で隠遁の時期が長かった筆者の独特な世界観を読み取った。その構造について、「語り手」と「作者」の関係性について、さらにそれが持つ「小説的」要素を従来から指摘されている虚構性と構造的な問題から検討した。

平成 28 年度

当該年度の実績は、以下の通りまとめられる。最大の成果は、9月4日・5日の2日間、神奈川大学外国語学研究所、神奈川大学人文学研究所 中国古典小説研究会主催によるシンポジウム「中国古典小説研究 30年の回顧と展望」に参加、「重読“杜十娘”-以林語堂の改編作品を中心-」という題名で中国語による発表を行ったことである。上記の発表を踏まえた論文が『中国古典小説研究』第20号に査読付論文「杜十娘怒沈百寶箱」の翻案について「杜十娘」からMiss Tuへ」(2017年3月 pp.25-38)として掲載された。ここでは、単に翻案の事象について紹介するのにとどまらず、林語堂が白話小説から英文小説に改編するに当たり、語り手を明確化し、入れ子構造を構築するなど、古典小説を近代小説にしようと手法を凝らしたことを指摘し、古典小説が持たない近代小説の性質について明確化した。さらに関連する研究として、日本における「杜十娘」翻案作品の総括を「翻案作品分析からみた「杜十娘」」として『宮崎大学教育学部紀要 人文科学』88号(pp.23-28、2017年3月)に論文としてまとめた。ここでは、日本での研究では、中国小説にどのような問題があるかとらえていたのかについて考察した。

特記すべきは、明代自伝文の記述から小説の叙述について考察を試みていた前年度の方針を転換し、明末の白話短編小説の英語による翻案作品の分析・検討に重点を移したことである。これにより、当初の計画とは方向性が変わったものの、より本来のテーマを発展させられる方向へと研究を進めたといえよう。

平成 28 年度・29 年度

平成 29 年度は、28 年度中に発表できなかった(刊行されなかった)論文があったことから、期間を延長したが、実質的な研究は 28 年度までであったといえる。また、29 年度は前年度までの研究を補足する論文を執筆することができた。

28 年度は、10月の日本中国学会第69回大会(山形大学)において、「近代知識人の古典小説観について 林語堂をてがかりに」と題し、口頭発表を行うことが出来た。本研究は、中国古典小説研究を行う上で常に抱えるジレンマである、「小説」とは何を指すのかという問題意識と、古典小説の定義づけを行うことを目的の一つとしていたが、古典小説が登場したばかりの頃に中国近代知識人自らが中国古典小説を英語版に翻案した事例を分析することで、直接その問題にアプローチすることができた。特に、翻案作品執筆時に利用した資料の中身を精査することから、当時やと姿を現したところの近代的価値観に基づいた「小説」という概念が、当時どのように知識人に共有され、どのように敷衍していったのかについて多くの示唆を得ることができた。一方、日本で新発見された白話小説(「三言」)の情報が知識人の間でどの程度共有されていたのかや、海外在住の華人達が自分たちの文化として古典小説をどのようにとらえていたのかなど多くの未解決の点があり、発表会場では多くの指摘を受けた。そのため、それらの指摘を踏まえた論文作成の必要性がでてきた。年度中この問題に関連した論文「林語堂による英訳『鶯鶯傳』について」を執筆し、翻案作品の内容を分析してその改編について考察した。これは元来の研究計画にもあった、「伝」という形式の文章の翻案であり、小説という概念について考えるよい題材といえる。しかしこの論文については、本の刊行が30年度にずれこんだ。29年度に入り、5月に「林語堂による英訳『鶯鶯傳』について」(『アジア遊学』218、181-190頁)を発表した。ここでは検討しきれなかった問題について、同じ作品について特に作品の序文についての考察を行い論文を執筆し、翌3月に「林語堂による英訳『鶯鶯傳』前書きの検討」(『宮崎大学教育学部紀要』第92巻、121-129頁、2019年)を発表し、前述の論文の内容を補足することができた。後者の執筆にあたっては、9月22日に東山之会(京都女子大学にて開催)において、「林語堂による英訳『鶯鶯傳』に関する諸問題」を口頭発表し、そこに参加していた唐代文学研究者から専門的知見に基づいた意見を得ることができた。唐代文学研究のこれまでの経緯から、林語堂の翻訳当時の彼の文学的価値観の背景を理解することができた。また、不明瞭であった英訳の日本語訳部分についても意見をいただき、今の時点での確定を行った。

本研究は、当初は明末の作品を対象と考えていたが、後に発見した資料がよりテーマに近い研究ができると考え対象を修正した最終年度までに林語堂の残した本案作品の中でまずは一作品について検討することができた。一方、日本で新発見された中国古典に関する資料の情報が知識人の間でどの程度共有されていたのかや、海外在住の華人達が自分たちの文化として古典小説をどのようにとらえていたのかなど多くの未解決の点があり、本研究を引きつづ形で始める、基盤研究C「中国近代における「古典小説」概念形成に関する研究」においてさらに深化させることができよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

1. 上原徳子「林語堂による英訳『鶯鶯傳』前書きの検討」『宮崎大学教育学部紀要』第92巻、

2019、pp.121-129 査読無し

2. 上原徳子「林語堂による英訳『鶯鶯傳』について」『アジア遊学』218、2018、pp.181-190 査読無し
3. 上原徳子「翻案作品分析からみた「杜十娘」」『宮崎大学教育学部紀要 人文科学』第88巻、2017、pp.23-28 査読無し
4. 上原徳子「「杜十娘怒沈百寶箱」の翻案について 「杜十娘」から *Miss Tu*へ」『中国古典小説研究』第20号、2017、pp.25-38 査読有り
5. 上原徳子「試論白話小説与文言小説之間的改編問題」『2015年明代文学国際学術研討会 論文集』小説、戯曲巻、2015、pp.251-262 査読無し

〔学会発表〕(計4件)

1. 上原徳子「林語堂による英訳「鶯鶯傳」に関する諸問題」東山之会、2018年9月22日
2. 上原徳子「近代知識人の古典小説観について 林語堂をてがかりに」日本中国学会第69回大会、2017年10月8日
3. 上原徳子「重読“杜十娘”-以林語堂の改編作品為中心-」中国古典小説研究30年の回顧と展望、神奈川大学、2017年9月5日
4. 上原徳子「試論白話小説与文言小説之間的改編問題」明代文学学会(籌)第十届年暨2015年明代文学国際学術研討会、2015年8月18日

6. 研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。